

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—



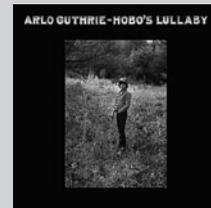
ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第9回
アメリカ大陸を走る列車の心

Arlo Guthrie
『The City Of New Orleans』



Arlo Guthrie
"Hobo's Lullabye"
アーロ・ガスリー
『ホーボーズ・ララバイ』
Reprise ©MS2060 [1972]
→ヴィヴィッド ©VSCD085

今回はアメリカで一番有名な列車の歌だ。列車の歌なんて、日本では童謡でもない限りそうそうないかもしれないが、アメリカ人にとっての列車にはロマンがあり、悲哀があり、思い入れがある。ステイヴ・グッドマンが作った「シテイ・オブ・ニューオーリンズ」は、ことさら感慨深い。彼のデビュー・アルバム『ジャケッツ』に、ソングライター・ジョン・プラインが「The

best damn train song ever written」と書いたように、これまでで一番のトレン・ソングといえるだろう。とはいえ、俺がこの曲を初めて聞いたのは、ステイヴ・グッドマンのものではなく、アーロー・ガズリーのヴァージョンだ。そもそもこの曲は、ワイリー・ネルソン、ジョン・デンバー、ジョニー・キャットシュ、ジュディー・コリンズ、ジェリー・リード、

チェト・アトキンス、ハンク・スノウなどといった、そうそうたるメンバーがカバーしている。なかでも一番知られているのはアーロー・ガズリーのヴァージョンだろう。本家のステイヴはソングライターとして自分のヴァージョンが売れてほしいと思っていたが、一方でアーローのヴァージョンが売れたことに感謝していたらしい。この一曲が有名になったおかげでステイヴは白血病で1984年に他界するまで音楽活動を続けることができた。客観的に聴いてみると、アーローのヴァージョンの方が売れるのは納得できる。ステイヴのオリジナルは軽いカントリー・ブルーズだが、アーローは汽車を思わせるリズムを使い、ポップに仕上げている。噂によると、新人だったステイヴはこの曲をアーローに聴いてもらうために直接アプローチしたという。アーローは当初あまり乗り気ではなかったが、ステイヴは聴いてもらうためにビールをおごった。その時アーローが出した条件は、曲を聴くのはビールを飲み終わるまでというものだった。しかしアーローは「シテイ・オブ・ニューオーリンズ」を気に入り、彼の72年のアルバム『Hobo's

Lullaby」に入れた。それがアメリカン・トップ40に入り、ヒットとなった。

Riding on the city of New Orleans
Illinois central, Monday morning rail
15 cars and 15 restless riders
3 conductors and 25 sacks of mail
All out on the southbound odyssey
The train pulls out at Kankakee
Rolls past the houses, farms and fields
Passing towns that have no names
And freight yards full of old black men
And the graveyards of rusted automobiles

この曲は「シテイ・オブ・ニューオーリンズ」という列車を舞台に、アメリカの鉄道が年々減っていることをテーマに展開している。「シテイ・オブ・ニューオーリンズ」は、イリノイ・セントラルというシカゴ〜ニューオーリンズ間を結ぶ鉄道会社が所有する列車の名前だ。20世紀の始まりには、農場が多いアメリカ南部から、工業都市の北の街に仕事を探してきた人々が乗ってきた列車である。当時は寝台車がなく、

安価だったが、人があふれていたさうだ。しかしこの曲を作ったステイヴが使うようになった70年代には、もう寂れていた。詩には「15両もあるのに、客は15人しかいない。コンダクターは3人。郵便入りの袋が25個。なんとも寂しいものだ。アメリカの汽車は郵便を運ぶためにいくつもの駅に止まり、ゆっくり走るイメージがある。南に向かって走る汽車の旅をオデッセイという言葉で表わしている。オデッセイはギリシヤ人の詩人、ホーマーが書いた旅の詩のタイトルだ。単なる旅というよりもっと深いストーリーを感じさせるニュアンスだ。シテイ・オブ・ニューオーリンズはカンカキという駅から出て、家や畑、野原の前を通り、名もない小さな村を通り抜ける。黒人が集まる貨物置場の前を通り過ぎると、捨てられて錆びた車体が並ぶ列車の墓がある。アメリカは東から西へと開拓されたとき、最初は馬車、次は鉄道、その後には道路、車という順で世の中に現われてきた。そんな社会で、この汽車、シテイ・オブ・ニューオーリンズは感じている。錆びた車が捨てられているなんて、汽車にはまだ意味があるはずなんじゃないかと。

Good morning, America, how are you?
Saying don't you know me, I'm your
native son?
I'm the train they call The city of
New Orleans
And I'll be gone five hundred miles
when day is done

ここからはサビだ。列車、シテイ・オブ・ニューオーリンズを目線で歌っている。アメリカよ、おはよう、元気か？俺のことを知っているだろうか？俺は生粋のアメリカ産だ。これは国とアメリカの人々に向けての声だ。忘れないでくれと歌っている。俺は、シテイ・オブ・ニューオーリンズと呼ばれている汽車だ。名前もある。リスペクトしてくれ。1日500マイルも走っている。と。ちなみにアメリカでは「グッドモーニング・アメリカ」という大人気のテレビ番組があるが、タイトル名はこのサビから取っているんだ。

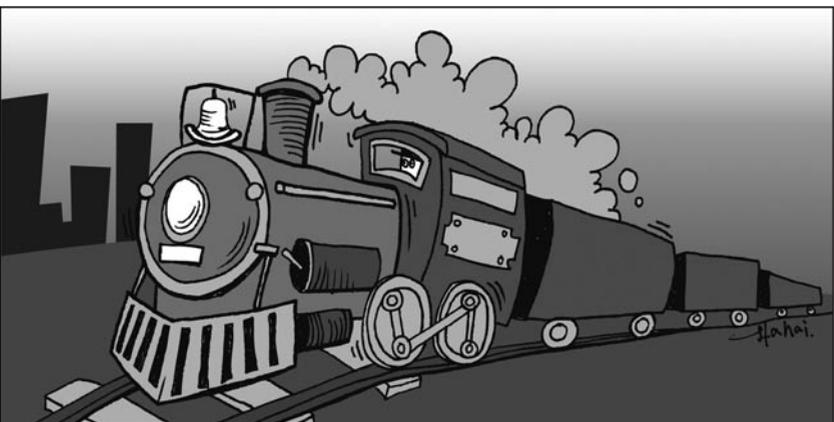
Dealin' card games with the old men
in the club car

And it's penny a point, and no one's
 keepin' score
 Pass that paper bag that holds that
 bottle?
 You can feel the wheels rumblin'
 neath the floor
 And the sons of Pullman porters
 And the sons of engineers
 Ride their father's magic carpet made
 of steam
 And mothers with their babes asleep
 Are rockin' to the gentle beat
 The rhythm of the rails is all they
 dream

今度はステイヴの目線だ。クラブ・カ
 ーと呼ばれるラウンジ・カーで、おじいさ
 んたちとトランプのゲームをしている。と
 いても、たいしたゲームではない。誰が
 勝ってもいいほどの。1ポイントに1セン
 トしか賭けていない。紙袋に入っているポ
 トルを回し飲みする。アメリカでは、パブ
 リックの場所では酒は飲んではいけない。
 しかし紙袋に入れて飲むなら、許されるこ
 とがある。列車の下から車輪がゴロゴロ

And I'm the train they call the city of
 New Orleans
 And I'll be gone five hundred miles
 when day is done
 Night-time on The city of New Orleans
 Changin' cars in Memphis, Tennessee
 It's half way home, and we'll be there
 by morning
 Through the Mississippi darkness
 Rolling to the sea
 And all the towns and people
 Seem to fade into a bad dream
 The steel rails it ain't heard the news
 The conductor sings his song again
 It's passengers will please refrain
 This train's got the disappearing
 railroad blues

列車、シテイ・オブ・ニューオーリンズ
 は、ちょうど旅が半ばにさしかかった夜、
 メンフィスで車両を換える。朝になった
 目的地に着くだろう。シシシッピの暗闇の
 中を海まで車輪を転がして。そして通り抜
 けていくすべての街と人々が、悪い夢にフ
 ェード・インしていく。なぜ悪い夢か？



それは、古い鉄のレールはニュースを聞い
 ていながら。もう鉄道の時代ではなくな
 っているの知らない。コンダクターが
 きた歌う。お客と一緒に歌うことを促して
 る。リフレインしてくれ。コンダクター
 は一般的には指揮者だが、汽車で働く人
 つまり車掌のことだろう。列車は忘れられ
 ていく事実を認めたくなく、コンダクタ
 ーはあつと現実を知っているのだろう。こ
 の列車は消えていく鉄道ブルースを抱えて
 いる。ブルースといえは音楽のジャン
 ルと思いがちだが、英語では落ちこんで
 る気持ちを指すこともある。

Just a singing
 Good night, America, how are you?
 Singing don't you know me?
 I'm your native son
 And I'm the train they call the city of
 New Orleans
 I'll be gone five hundred miles when
 day is done

最後のサビは夜が舞台だ。おやすみ、ア
 メリカは元気か？ってね。

いつているのが聞こえてくる。ここでプル
 マンという言葉が出てくるが、これはプル
 マンという人が経営していた寝台車両につ
 けられた名前で、1870年代に登場した。
 ポーターはそこで働く人を指し、経営者の
 プルマンはそのポーターとして黒人の元奴
 隷を雇った。きつと南部の家の中で働いて
 いた奴隷はマナーが良かったのだろう。
 そんな歴史があり、そして今、当時のプ
 ルマン・ポーターや機関車を運転するエン
 ジニアの息子たちが、自分たちの父親が作
 ったチームでできている魔法の絨毯に乗
 っているという。ちょっとわかりづらいが、
 詩的な描き方だ。この汽車には伝統がある。
 お母さんに抱かれた子供たちは、列車の優
 しい振動のなかで寝ている。'rock'という
 言葉を使っているが、これは優しく揺れる
 という意味だ。父、母、息子、幼い子供た
 ちも、みんなこの電車に守られている。そ
 れは楽園のようにも感じられる空間だ。

Just a singing
 Good morning, America, how are you?
 Saying don't you know me, I'm your
 native son?

Just a singing
 Good night, America, how are you?
 Saying don't you know me?
 I'm your native son
 Well I'm the train they call the city of
 New Orleans
 And I'll be gone a long, long time
 when day is done

グッドマンが亡くなった84年、ウィリー
 ・ネルソンのヴァージョンは、グラミー賞
 のハズスト・カントリー・ソングを取った。
 鉄道はアメリカ人にとって、深い意味が
 ある。新しい世界、生活を探す道そのもの
 だ。南部の元奴隷だった黒人たちも、列車
 に乗って新しい自由の生活を探しに行った。
 彼らには天国に行く列車もある。そのアメ
 リカン・ドリームを人々に与えた列車が、
 車とトラックのおかげでなくなってきた。
 それをシテイ・オブ・ニューオーリン
 ズは気づきたくないんだ。

実は今でもこの列車は走っている。プル
 マンと呼ばれる車両はなくなり、昔の豪華
 さは感じられないが、アメリカ大陸の列車
 ンズには乗ったことがない。いつなくなる